

# JBIA 洋書輸入協会会報

Vol. 33 No. 3 (通巻382号) 1999年3月

## 理事会報告

2月24日(水)

1. 新規約で制定した英文略称 JIPA が使用不可と判断したことを受けて再検討の結果、日本洋書協会の英文名称を Japan Association of International Publications、略称を JAIP とし、5月14日の定時総会にて承認を求めることとした。またロゴは今後適切な時期を選んで制定を検討する。
2. 海外出版物の著作権保護支援の一環として、日本複写権センターの機能強化を他の関連団体と協調して申し入れる。
3. 1999年度定時総会会場をパレスホテルとする。
4. 会員増強のための特別委員会を役員改選後に発足させる。また入会勧誘資料整備の準備を今期中に開始する。
5. 1999年版ダイレクトリーの校正作業を3月初めより開始する。(ダイレクトリー委員会)
6. 3月2日に理工医学系図書館より講師を招いてセミナーを開催する。会員研修と共にユーザーに協会をアピールする機会としたい。(広報渉外委員会)
7. 東京国際ブックフェア「洋書バーゲン」では出展社名を列記した看板を掲示する。(事業委員会)
8. 事務局職員出張規定が総務委員長より提案され承認した。

## 海外ニュース

### 著作権侵害深刻

アメリカの著作権関連企業の企画により、INTERNATIONAL INTELLECTUAL PROPERTY ALLIANCE (IIPA=国際知的所有権連合)が行った国際的な海賊版行為に関する調査によると、1998年一年間の海賊版による損害は総額123億8千万ドルに上るとのことである。被害金額が最も大きい分野は相変わらずコンピュータ・ソフトで、違法なコピー行為のせいで、ビジネス用アプリケーション・ソフトの製作者が昨年1年でこうむった損害は46億5千万ドル、エンターテインメント系ソフトの製作者のそれは34億ドルであった。書籍出版社も、海賊版出版のために1997年には6億6,530万ドル、1998年には6億8,520万ドル相当の被害を受けている。

書籍出版社にとって最も深刻な著作権問題は中国におけるもので、IIPAの試算によると、1998年に同国で行われた海賊版出版行為の金額は、1億2,500万ドルに相当するとのことだ。同様の被害が出ている国としては、ロシア(4,500万ドル)、パキスタン(4,000万ドル)、フィリピン(3,900万ドル)、韓国およびメキシコ(3,500万ドル)、インドおよびインドネシア(3,000万ドル)、タイおよびトルコ(2,800万ドル)などがある。

今回の報告書に添えられたコメントのなかで、IIPA代表のMr. Eric Smithは、WIPOのデジタル情報に関する協定(1996年、ジュネーブにおいて締結)などを

## 目次

理事会報告・海外ニュース	1	セミナー聴講記	3	自然界のリズムと北国の春	6・7
委員会活動ほか	2	1998年洋書輸入統計(前編)	4・5	広告	8

含む様々な協定を批准することを、これら諸外国に働きかける旨、Mr. Charles Barshefsky 通商代表に強く求めている。Mr. Smith は、WIPO の協定は増加する電子取引 (e-commerce) における「基本的な法的枠組みを提供している」と述べている。彼はまた、「これら

新しく画期的な媒体のグローバルな性質から言って、全世界的な規模でデジタル情報に関わる協定を結び、法的規制が行われることが必要で、そのために官民一体の行動が望まれる」とも述べている。

PUBLISHERS WEEKLY/February 22, 1999

## 委員会活動

### 〈事業委員会〉

東京国際ブックフェア99 (4月22日～25日)「洋書バーゲンコーナー」には12社参加、ワゴン数44台とほぼ昨年同様の規模になります。2月25日に参加社対象の説明・打合せ会を開催し、会場の設営の方法、看板の文字など主催者側に対する希望事項についても討議しました。(参加社：絵本の家、ゲート書房、HBJ、インターナレッジ、丸善、三善、日本出版貿易、東光堂、タトル商会、UPS、洋販、雄松堂=ABC順)

## 文化厚生委員会だより

### 麻雀大会

去る3月5日、同好会主催の麻雀大会が四馬露(東京駅前)で開かれました。近年は年一回の大会とは言え、今年で34回目を数えるとの事、皆さん年度末等多忙の折ながら20名の雀士が集合、腕を競いました。

麻雀人口の減少を嘆くおじ様達にとってこの大会は己の存在価値を示す格好の場でもある為か、いずれ劣らぬ猛者揃い。回が進むにつれアルコールも手伝って、最終

回のボルテージは最高潮。

結果は、常に沈着冷静に打ち進めた内田さん(東亜)が97点の高得点で見事優勝。優勝賞品を手にして「家内に良いプレゼントが出来ました」と、愛妻家らしいスピーチでお開きとなりました。紅一点参加の尾崎さん(エイビス)の4位はお見事。昨年優勝の雨宮さん(タトル商会)のブービー賞も見事(?)

いつもながら幹事役の村山さん(ゲート)に感謝し、大会の報告といたします。

### 成績

優 勝	内田(東亜)	97点
準 優 勝	塚本(大洋交易)	52点
3 位	白井(東亜)	47点
ブービー賞	雨宮(タトル商会)	-58点

(友隣社 上原鉄男記)

### 社名が変わります

会員名：株式会社 H B J

新社名：株式会社ハーコート・ジャパン

英文名：Harcourt Japan, Inc.

変更日：1999年3月30日

※住所、電話・Fax番号は従来どおりです。

### 事務局に空き巣狙い!

去る2月28日(日)午後6時過ぎから3月1日(月)未明にかけて、日本洋書協会が入居しているビルに賊が侵入、事務局を含む7室が被害を被りました。当事務局では金庫の扉が壊され、現金9万円余が盗まれました。当ビル1階の管理室窓を破った後、玄関扉内側を外から開かないように細工している様子が防犯ビデオに写っていて、常習者による計画的単独犯行と警察ではみえています。協会始まって以来の「警察沙汰」に後味の悪い年度末を迎えました。



## ＝日本洋書協会セミナー『洋書輸入業者との対話—その2—』に参加して＝

平成11年3月2日(火)に日本洋書協会主催セミナーが開催されました。

講師に早稲田大学理工学部図書館課長 碓氷喜信氏と日本医科大学中央図書館事務室長 殿崎正明氏を迎え、「洋書輸入業者との対話その2・医学・理工系大学図書館の収書活動、最近の動向 今後の予測と展望」をテーマに参加人数50名となかなか盛況で、興味深いお話でした。

まず碓氷氏より、早稲田大学理工学部図書館の内情を伺いました。『購入図書の外貨の値上がり、業務のアウトソーシング等の理由により、大学の総予算が5%カットされ、さらに円安と版元価格の値上がりにより、図書購入費は年々減少しているが、CD-ROM、電子ジャーナル、外部 Database 検索の費用は増えている傾向にある。洋書のほうになるとさらに予算の余裕がない。継続本購入に当てるのが精一杯。これらの対策として考えているのは、①電子ジャーナルへの移行。電子ジャーナルがプリント版より安ければ、電子ジャーナルを購入する。②他の理工学系の大学図書館と提携する。コンソーシアムで資料の共有をする。③学内で重複して買っている図書を整理する。』次に講読媒体の変化についての氏の見解は『プリント版と電子ジャーナルは、並列して存在して行くだろう。電子ジャーナルでは、Full Textで見られるものを重要視しており、次年度は、100タイトル増やす予定。今年度、理工学部内で独自でサーバを購入し、Chemical AbstractのCD-ROMをイントラネットにしたところ好評で、新たな二次文献の提供を検討中。外部データベースもINSPECを使用しているがこれも使用頻度が高かった。現在スタンドアロンで使用しているものもいずれネットワークへ移行する予定。電子ジャーナルの利点は、情報が早く、Linkされているので検索に便利。これからは、電子ジャーナルとプリント版の選別がなされるであろう。また、Online Shoppingを検討中である。情報が早く、安価で外貨でカードで引き落としができる。反面、注文したものが来なかった場合のリスクも負わなければならない。しかし、実績のあるコンピュータ関係の出版社には、直接発注することも考えている。』最後に洋書協会に望むこととして『①コンソーシアム(他大学図書館との共同・分割購入)

を考えているので、仲介をやってもらいたい。②電子媒体の知識がある営業マンを求む。サポートができる人がほしい。いくら値段が安くてもサポートできないのでは、無意味。③外国雑誌をなるべく安く講読できるように便宜を図ってほしい。例えば早期注文や三年講読すると安くなるなど。④より多くの情報を提供してほしい。⑤図書館員と業者と共同で勉強し、情報交換できる場を設けてほしい。⑥業者からも版元へ外国雑誌の価格を安くするように働きかけてほしい。このままで行くと共倒れである。』と耳の痛い内容でした。

殿崎氏のお話では、『日本医学図書館協会の統計によれば、年々、洋書も洋雑誌も日本での購入タイトル数が減ってきている。超コアな雑誌ほど高い。購入費用は増えているのにタイトル数が減っているということは、それだけ価格が高騰しているということ。ある日突然、日本からなくなる雑誌も出てくるかもしれない。対策としては、①日本医科大の4つの病院の各図書館で重複しているタイトルは、なるべく電子ジャーナルにする予定。②他医科学系図書館と分担購入を検討。③分担校内での文献複写を安価にする。④Copyと電子ジャーナルとのセット購入を考える。』と、洋雑誌の価格値上がりは深刻な事態を招きかねないとの指摘もありました。また、『重複していたり、古くなった図書を保存書庫を有する業者へ寄贈するとして、それらの本の複写を安価で図書館協会のメンバーに提供してくれるようなシステムが欲しい。』という提案も出ました。これに対しては業者から『Copyrightの問題をどうするのか?洋書協会としては、Copyrightを守るという姿勢をとるべきではないのか。著作権センターに入会すべきかどうかという議論も出ている。』という質問がでしたが『著作権センターにお金を払ってもよいが、今やプリントのCopyrightをうんぬんするような時代ではない。』というお答えでした。

予算の不足を補う手段として、電子ジャーナル、コンソーシアムへの関心はますます高まっていく中で、業者とお客がお互いに協力、模索しながらも新しいビジネスへの転換期がやってきているように思いました。

ユサコ(株) 大和 浩子

# 1998年（平成10年）1月～12月の洋書輸入統計（前編）

会報委員 荒木 亮一

大蔵省関税局から発表された、1998年（平成10）1月～12月の日本貿易統計より洋書関係の数字（品目番号49.01～49.11.等）を纏め、若干の分析を試みました。

## 1. 1998年1月～12月の洋書関係輸入通関統計表

（表1） （単位 百万円）

分類	品目	97.1-12月 輸入価格	98.1-12月 輸入価格	前年比	構成比
書籍 及びそ れに類 するも の	単一シートのもの	121	122	101%	65%
	辞典及び事典	545	345	63%	
	その他のもの	31,868	32,603	102%	
	幼児用絵本	2,919	2,183	75%	
	小計(1)	35,453	35,253	99%	
	楽譜	854	818	96%	
	地図・海図	—	177	—	
	小計(2)	35,453	35,253	99%	65%
新聞 ・雑誌	一週に4回以上 発行するもの	107	109	59%	35%
	新聞	78	—	—	
	雑誌その他の定期刊行物	18,035	18,947	105%	
	小計	18,220	19,056	105%	
計	53,673	54,309	101%	100%	

注：楽譜、地図・海図（製本されたもの）は参考用。

新聞は統計表では区分されていない。

（関税上の品目番号49.01についての注記は次の通り）

### (1) 書籍類

印刷した書籍、小冊子、リーフレットその他これらに類する印刷物（単一シートのものであるかないかを問わない。）

（注1）単一シートのもの（折り畳みであるかないかを問わない。）

（注2）辞典および事典（シリーズで発行するものを含む。）

（注3）その他のもの（備考：この分類に一般の書籍が入る。書籍の郵便局経由のもの（Air Mail又はSea Mail）は、現品入荷月の15日までに通関の届出がされるため、約1ヶ月遅れで計上されている。

### (2) 新聞、雑誌類

新聞、雑誌その他の定期刊行物（挿絵を有するか有しないか、又は広告を含んでいるかないかを問わない。）

（注4）一週に4回以上発行するもの（備考：新聞ではないもの。）

（注5）その他のもの（備考：雑誌は、原産国から航空便または船便で購読者に直送されるものについては、最終号が到着したと認められる時点において通関の届出がされるため、初号入荷時より約1年遅れで計上されるものが多い。但し、航空貨物（Air Cargo SAL）等で到着するものはその都度通関手続きを経て輸入される。）

(3) 幼児用の絵本及び習画本（注意書きに、品目番号49.03項において「幼児用の絵本」とは、絵が主体で、文章が副次的な幼児用の本をいう、とある。）

### (4) 関税の基準について

イ. 輸入原価は、CIFまたはC&Fである。

ロ. 輸入原価が20万円以下（1社/月）の小額貨物は通関手続き免除のため含まれない。

### <分析>

1995年以來の円安傾向のなかで、書籍は輸入総額で前年の実績と比べ、略横這い状態に終わったかに見えるが、実質的には減少したことは明らかである。一方、雑誌の5%の伸びについては、紙代の値上がり等による版元定価上昇、1996年の円高による定価の割安感（一年遅れで計上されるため）、平行輸入によるロスの一部回復等、いろいろな要因が考えられる。

しかし、大学図書館は近年の急速な電子図書館化、制限されつつある予算の効率的配分の必要性等から新しい対策、電子ジャーナル導入等を迫られているので、ハード・コピーの先行きが明るいとは言い難いようである。

2. 最近10年間の推移（備考：1989年の総輸入額が最近10年のなかで最も平均値に近いので、指数を1989年を以て“100”とした。）

(表2) (単位 百万円)

歴年	書籍			新聞・雑誌			計		
	価額	前年比	指数	価額	前年比	指数	価額	前年比	指数
1989	27,181	117%	100%	14,083	104%	100%	41,264	126%	100%
1990	33,274	122%	122%	16,966	120%	120%	50,240	122%	122%
1991	27,124	82%	100%	14,399	85%	102%	41,523	83%	101%
1992	26,597	98%	98%	19,360	134%	137%	45,957	111%	111%
1993	24,109	91%	89%	15,928	82%	113%	40,037	87%	97%
1994	23,924	99%	88%	16,023	101%	114%	39,947	100%	97%
1995	24,520	102%	90%	17,418	109%	124%	41,938	105%	102%
1996	29,399	120%	108%	19,844	114%	141%	49,243	117%	119%
1997	35,453	121%	130%	18,220	92%	129%	53,673	109%	130%
1998	35,253	99%	130%	19,056	105%	135%	54,309	101%	132%

## &lt;分析&gt;

書籍と新聞・雑誌の合計輸入額では史上最高であった昨年を凌いで2年連続して500億円台を達成している(前年比+1%)。しかし、洋書協会も不況感は拭われず、1998年度中に数社が退会し、正会員が75社と減少傾向であった。輸入額の増加が直接業界の取引高の増加に繋がったのは昔のことで、現状では全く当てはまらない。洋書、洋雑誌マーケットが価格にセンジティブになってかなりの時が経過したが、日本全体の経済不況に助長され、特に大量注文主への「超」特別サービス等のため、増収でも減益が実体ではないだろう。

為替の変動を加味すると、1998年度は、円が最高値をつけた1995年の合計輸入額との比較で-6.5%、前年度より-6.1%とそれぞれマイナス成長となっている。実質成長率は-5.1%である。洋書業界全体の活性化にはまだまだ日本経済の回復が待たれる。

書籍の輸入高としては、前年比-0.1%であるが、この10年間で30.0%、年平均では3.0%とそれぞれアップ(昨年の報告にある過去17年間の年平均アップ率と変わらず)であるが、毎年実施される版元価格の平均値上げ率を下回っている。

新聞・雑誌の輸入高は、前年比5.0%、この10年間で35.0%、年平均で3.5%とそれぞれ増加を示し、昨年の予想に反してプラス成長を示したことは喜ばしい。とは言え、やはり版元の値上げ率にも達していない。

再度、書籍、新聞・雑誌の合計輸入額に目を移すと、

この10年間で32.0%、年平均3.2%のアップ率であるが、情報形態の変化等から、今後も同様の推移が予想される。これは、各輸入業者におけるオーバーヘッドの上昇等の経営条件に照らして考えると、明るい将来を建設するためには、これからも「智恵は小出しにせよ」だと思う。

## 3. 主要国別およびその他の国別輸入通関統計

(表3) (単位 百万円)

国名	書籍			新聞・雑誌			計		
	価額	前年比	構成比	価額	前年比	構成比	価額	前年比	構成比
米	13,049	110%	37%	7,244	107%	38%	20,293	109%	37%
英	9,652	100%	27%	4,912	114%	26%	14,564	104%	27%
独	2,197	87%	6%	1,449	102%	8%	3,646	92%	7%
仏	839	110%	2%	426	117%	2%	1,265	112%	2%
オランダ	1,361	96%	4%	2,453	100%	13%	3,814	99%	7%
スイス	517	103%	1%	257	46%	1%	774	73%	1%
小計	27,615	103%	78%	16,741	106%	88%	44,356	104%	82%
その他の国	7,638	88%	22%	2,315	97%	12%	9,953	90%	18%
計	35,253	99%	100%	19,056	105%	100%	54,309	101%	100%

注記:「書籍」は、単一シート、辞書/事典、その他の印刷物および幼児用絵本を含む。新聞・雑誌は、週4回以上発行するものおよびその他の定期刊行物を含む。ドイツは1991年より東西合併の数字である。

## &lt;分析&gt;

主要6ヶ国からの輸入額前年比は表示のとおりであるが、1989年の輸入額と比較すると、米国は(+ )22.3%、英国は(+ )47.6%、仏国は(- )22.1%、オランダは(+ )46.7%、スイスは(- )35.3%であった。1989年にはドイツは西独のみの数字であったので(- )19.7%である。

1998年の書籍、雑誌等の輸入額の合計は1989年比32%アップであるが、その大半は米国、英国、オランダ、更に中国、香港、シンガポール等(後編に掲載予定)からの輸入で、かなりの増加を示している。

相良廣明・洋書輸入協会顧問より引き継ぎ、今回より当報告を担当いたします。ご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。お役に立つ報告にすため、忌憚ないご意見をお待ちいたします。

(後編に続く)

## 自然界のリズムと北国の春

### 島岡 丘

3月と聞くと、今でも、雪融けの季節が脳裏を駆けめぐる。それぞれ育った自然環境によって思いは様々だろうが、昔イギリスで発行され日本でもよく使われたPOD (Pocket Oxford Dictionary) には、Marchのところを引くと、'windy month' という定義が載っていたが、今では英語がもはやイギリスの言葉でなく、グローバルになってしまった結果、季節感などに触れることが難しくなったようだ。オーストラリア、ニュージーランド、南ア連邦などの南半球では、季節が逆転する。季節感など、英語の辞書に触れないほうが無難だと考えるようになったのだろうが、少し淋しいような気もする。日本のように南北に長い国では、同じ3月といっても北と南とは随分季節感が異なるようだ。

「雪融け」は北国では、雪が融けるという物理的な現象だけではない。「文化の日」の11月3日は、半世紀前までは「明治節」と言い、明治天皇のもと、鎖国の時代に別れを告げ、近代国家に日本を生まれ変わらせた先人達の偉業を称えるべく、学校で式典を行ったものだったが、その行き帰りの道は「雪道」で、長靴が必需品だった。降った雪がしばれた夜のため、堅く凍ってしまう。屋間は直射日光を浴びた路面の雪は、少しは融けるが、融けたところがまた寒さで凍ってしまうので、路面は氷の表面のようにすべすべし、油断すると滑って転びそうになる。道路につもった雪は路上一面に固まり、来春まで融けることがない、いわゆる「根雪」になる。

3月になると、背中に浴びる太陽の光はその暖かみを増し、春の到来を感じさせる。あたり一面はまだ雪で覆われているが、大気の変化に呼応するかのように土の中からも、地表の雪を融かす力が湧き上がってくる。3月の中旬になると、一層その力が強まり、母なる大地が土手や丘の斜面にその黒々とした逞しい姿を点々と見せはじめる。およそ半年ぶりに目にする黒土には無限の自然の力とリズムを感じる。

一方、道路の雪が融け始めると、馬そりが通ったことを示す馬糞が現れる。道が黄色くなり、所々に水がたまる。長靴にも黄色いものが沢山ついてしまうが、これは一過性のものとして、あまり気にならない。

北国の春を最もよく実感させてくれるのは川の流れである。その清らかな雪融け水のため、川の水嵩が増し、

時折大きな雪塊や氷の塊を大雪山の山麓から大量に流し出して来るのである。今は車で橋などを一気に渡ってしまうが、歩いて橋を渡ると春が来たことをその勢いよく流れる川を眼下に見て実感する。

季節の変化を強烈に実感するのは北国に限る。長い冬の寒さに押さえ込まれていた草木や動物達も、春の到来で息吹きの機会を与えられ、精気が蘇り、活気がみなぎり始める。常夏の国では寒さ知らずで住みやすいようであるが、北国の温暖の変化は人の気持ちに忍耐とリズムミカルな喜びを与えてくれ、生活の実感を強く感じさせるものがある。詩人が排出する地域も寒さの厳しいところに多いのではないかとさえ思う。

屋根に積もった雪も、屋根の雪下ろしをしなくても自然に融けて、ひとりで音を立てて軒下に落ちていく。町の通りに面している商店などは通行人に怪我をさせるといけないので、雪止めの杵を屋根に組んでいるところもある。北国では桜の満開は5月の10日過ぎである。6月は内地（主に本州をさして言う）では梅雨のじめじめした日々が1ヶ月ほど続くが、北国では梅雨がなく、6月はすがすがしい。夏は比較的短く、10月の下旬にはもう雪が降り始めるので、冬支度を夏の間にしなければならない。裕福な家は石油ストーブのスイッチさえひねれば床暖房となり、家の中はとても暖かく心地よいが、貧しい家庭では、暖房用の薪や木の切れ端を近くの木材会社から安く買い入れリヤカーで運んだり、丸木のまま買ってきて鋸と鉋でストーブに入る大きさに切ること何日も過ごさねばならないところも少なくなかった。

今は便利な石油ストーブが普及しているが、その前は石炭ストーブであった。良質の石炭であるとあまり煙も出ず、火力も強いが、安い石炭しか買えない家庭では、ストーブの火がつきにくく、白樺の樹皮（地元ではガンピと言う）や薪を多く使うことになる。何日かたつと、ストーブの煙突に煤がたまり、そのためストーブが燃えにくくなる。1週間に1回は煙突掃除をしなければならない。顔を真っ黒にして、手ぬぐいで横顔を覆って、束子に竹製の長い柄を大きな丸にして肩にかけている人がよく歩いていたが、それは家庭の煙突掃除を商売にしている人だ。

冬は家の窓から外が見えなくなる。これは窓ガラスにつく水蒸気が凍り、厚さが何センチにもなって「凍りの花」を窓の表面に咲かせるからだ。外を歩く場合、摂氏マイナス10度以下になると耳が寒さで痛くなる。耳かけ

をし、厚い外套をして出かけるのだが、私の経験した一番寒い時は零下33度だった。その時は15分ぐらい外を歩くだけでも顔中が痛くなり、指の感覚が痛さを通り越して麻痺したようになる。しかし、寒いということはマイナスイメージだけではない。そんな寒い日は、空が真っ青で、白い花が咲いたようになる木々の枝とすばらしいコントラストをなし、メルヘンの世界をかもし出すのである。寒さのおかげで、害虫やばい菌がすべて死滅し、すがすがしい朝の銀世界が展開する。一方、家庭や会社でもストーブの回りにみんなが寄り添い、団らんの輪ができる。

私が英語の教科書を書く機会を与えられて、まず書いてみたかったのは北海道の春先の情景である。たまたま、私の母校の旭川北高に留学していた Mike 君がアメリカにいる妹宛に書いた手紙文であることを想定し、次のような文章にした。

Dear Becky,

I go to a Japanese high school. There are forty students in my class. I don't know most of them yet, but everyone is kind to me.

Spring has special charm here in Hokkaido. The river waters carry snow down from the mountains. Everything wakes up from its long winter sleep. Mother earth comes out here and there...

以上の文章を日本語に直すとおおよそ次のようになるのかもしれない。「ベッキーちゃんへ、お兄ちゃんは今日本の高校に通っている。クラスの人数は40人で、まだほとんど知らないけれど、みんな僕に親切にしてくれている／ここ北海道では春は特別の魅力がある。川の流れる山々から雪を運び出して来るんだ。森羅万象がその長い冬の眠りから目覚め、母なる大地があちこちと顔を覗かせる。...」

この英語の文章は教科書出版の老舗である開隆堂出版から出た文部省検定高等学校英語教科書 *Green Age* に掲載したもので、故速川浩氏と井出祥子氏との共著であるが、教科書の使用期間は3年間と短く直ぐに絶版になる。ただ、この文を読んでくれた10数万人の高校生達がいたということは喜ぶべきことかもしれない。

毎年春になると、自然は過去のしがらみからすっかり脱皮し、新しい活力で、新しい緑の世界を作り出すべく全力を出しているように見受けられる。人間もかくありたいものだ。過去に何か嫌なことがあると、それにこだ

わり、何時までも心に抱いて新しいことに向かおうとしないのが人間の常であるのかもしれない。そう言う自分も若いときは実に不完全であった。今でも不完全さがなくなったとは思わないが、あるとき、ブラジルの友人が、自分たちの国は多くの問題を抱えているが、それは努力の目標が立てられることであり、There is room for improvement. は生き甲斐であると捉えているのが印象的であった。つまらぬことに一喜一憂し、神経をすり減らし、何ら創造的な思考をしないのは残念なことである。金融界はバブルで踊らされた時期が過ぎ、ようやく新たな気持で仕事に打ち込むようになったのは良いことだったのかもしれない。

自然界は常にリズムをもって動いている。川はその流れが止まることがないし、草木も成長し、最盛期を迎え、木枯らしとなり、続いて冬眠、また成長といったリズムを繰り返すリズムとなるのであるが、その動きの中にも螺旋状の成長と発展を読みとれる。第4回国際高等教育学会で“The growth and development of University of Tsukuba”の題で発表した。その内容も螺旋的な発展的リズムをイメージして行ったことを思い出す。

自然界にはそのリズムがあるようにそれぞれの言語にもリズムがある。アメリカ人の母語のリズムに対する直感を筆者代表の故稲村松雄氏が、そのまま採用したことで、原案だった教科書名が、Andy and Betty から Jack and Betty となったそうであるが（大谷泰照氏談『英語教育』1月号）私の専門の立場から言えば、これは賢明な選択であったと言える。Andy and Betty だと強弱強弱の不安定なリズムパターンになり、自然とは言えない。Jack and Betty はその点で、強弱強弱のバランスの良い英語の自然なリズムを構成している。それに近いリズムを日本語で得ようとする「若干便利」といえばその近似値が得られると書いたことがある（拙著『カナ活用 リズムとレダクション』（洋販新書）。growth and development も英語としての自然なリズムが存在する。つまり、|| 強弱強 | 強弱強 || のリズムである。図示すると次のようになる。

|| ○ — — | ⊙ — — ||

growth and development

グオウス (ン) ダヴェウ・ラップメント

ことばの学習も自然のリズムを尊重する必要があるだろう。

(茨城キリスト教大学教授)

待望の本文校訂版・新選集が刊行！  
(ピカリング・マスターズ・シリーズ)

ウィリアム・コベットの著述選集／全6巻

## William Cobbett Selected Writings

Ed. by Leonora Natrass  
Advisory Editor: James Epstein

1998. in 6 Vols.  
(ISBN: 1-85196-375-8 / 注文番号MBN: 9528882) セット在庫価格 ¥121,260

近代英国の政治、ジャーナリズム研究上重要な位置を占める週刊評論雑誌『ポリティカル・レジスター』(Political Register)の約33年にわたる編集、労働者のための『文法書』(A Grammar of English Language)の執筆、独特の文体による数々の論争的著述、後年の政治家、農業家としての活躍でひろく知られる英国の歴史的言論人、ウィリアム・コベットの本文校訂版著述選集が刊行されました。

膨大な彼の著述のうち、現在文献として比較的参照し易いものは、内容上、主観的論述に偏向したもののみを取り上げたものが多く、コベットの歴史的重要性を再評価し、多面的な近代英国研究に学術的に寄与する、真の意味の学究的文献コレクションの刊行が待ち望まれていました。

本集成は、ジャーナリストとしての、米国における初期の著述から、当時70,000部以上販売したとされる1816年から1817年の'Twopenny Pamphlets'、入獄中発表された記事など、彼の死後まもなく入手不可能となっていた貴重な資料を含みながら、年代順に重要な業績をあとずける、好個のコレクションとなっています。

伝記的・批判的序文、詳細な注解、脚注、付記が十分に付載される学究的新選集。

ロバート・オウエン、メアリ・ウィルストンクラト、メアリ・シェリーの全集の刊行で定評を確立した「ピカリング・マスターズ」版です。

Leonora Natrass is lecturer in Literary studies at Nottingham Trent University. She has written extensively on Cobbett and her publications include William Cobbett: The Politics of Style (1995) which is the first full-length literary analysis of Cobbett's rhetorical strategies and Cobbett's New Register (Journal of the William Cobbett Society), 1991.

James Epstein is Professor of History at Vanderbilt University, Nashville, USA.

(Pickering & Chatto Pub., GBR)



日本総代理店

〔本社・日本橋店〕〒103-8245 東京都中央区日本橋2-3-10 ☎(03)3272-7211 振替:00170-5-5

首都圏店舗 = お茶の水・有楽町・内幸町・浜松町・赤坂・渋谷・新宿・府中・北千住・津田沼・柏・取手・土浦  
支店・店舗・営業所 = 千葉・八王子・大宮／札幌・盛岡・仙台・新潟・筑波・横浜・静岡・浜松・名古屋・津・  
岐阜・金沢・京都・大阪・神戸・姫路・岡山・松山・広島・福岡・長崎・鹿児島・沖縄／  
ニュージャージー・ロンドン・シンガポール

1999年3月

通巻第382号

日本洋書協会

編集者 高橋 紘

☎103-0027 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室 ☎(03)3271-6901 FAX.(03)3271-6920

印刷所 = 藤本総合印刷株式会社